

人工内耳装用幼児の語彙の発達的变化

—難聴の発見が遅れた幼児への言語指導を通して—

○庭野賀津子¹⁾ 佐々木あき子^{1) 2)}

(東北福祉大学大学院教育学研究科¹⁾ 仙台市立長町小学校²⁾)

KEY WORDS: 難聴幼児、人工内耳、日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙

【目的】

日本産婦人科医会の調査では、分娩取扱機関における新生児聴覚検査実施可能な施設の割合は、2013年(平成25年)には88%となっており、多くの医療機関において検査を実施できる体制が整備されてきている。一方で、2009年日本耳鼻咽喉科学会による調査では、新生児聴覚スクリーニング検査で両側Pass(正常)とされた乳児のうち、のちに2%が両側難聴と診断され、一側のみRefer(要再検)とされた乳児では12%ののちに両側難聴と診断されたことが報告されている。つまり、新生児聴覚スクリーニング検査には擬陽性、偽陰性の可能性があることを考慮して、乳幼児期における聴覚のチェック体制について検討をしていく必要がある。

昨年度われわれが発表した「難聴の発見が遅れた幼児の人工内耳手術後の言語発達」では、新生児聴覚スクリーニングにおいてPassであった故に難聴の発見が遅れ、2歳近くってから高度感音性難聴と診断された事例について、遊びながら手話と音声言語の獲得を促すセッションを1年間実施し、手話と音声言語の表出語彙数の発達的变化を観察したことについて報告した。人工内耳によって聴覚活用が期待される場合でも、言語発達の初期段階では、手話の獲得を進めることが重要であることが示唆された。そこで本発表では、その後の言語発達過程について報告する。

【方法】

対象児：先天性両側高度感音難聴の女児。両親は日本語を母語とする聴者で本児は第1子。「ことばが出ない」という保護者の主訴により23か月時に医療機関を受診し、両側性高度難聴の診断を受ける。新生児スクリーニング検査時ではPassであったことから難聴の発見が遅れた。難聴の診断後、直ちに補聴器装用を開始するが補聴効果は乏しく、諸検査の結果、人工内耳適応と判断された。26か月時に右耳に人工内耳装用、44か月時に左耳に人工内耳装用。医療機関で週1回の言語指導を受けている。なお、本児は「津守式乳幼児精神発達質問紙」により、「言語・理解」以外の「運動」「探索・操作」「社会」「生活」において年齢相当の発達が確認されている(33か月時)。なお、本研究の遂行及び学会や論文による発表について、保護者より口頭及び書面で同意を得ている。セッション期間：本研究の第2報告者が40か月から48か月までの9か月間、月3～4回のペースで①聴覚活用、②発音指導、③絵日記やトピックスを中心としたセッションを行った。本児は38か月に、聴覚特別支援学校幼稚部に入学。言語発達の評価：日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙「語と文法」の語彙リストを用いて、月齢36か月、39か月、42か月、46か月の4回、手話と音声言語それぞれの生活場面における言語使用状況について確認を行った。

【結果】

語彙リストに基づく手話及び音声言語の表出語彙数の月齢変化を表1に示す。36か月以降、音声言語の表出が見られたが、同時に手話の表出語彙数も増加が見られた。また、38か月から聴覚特別支援学校幼稚部に入学したこともあり、集団での関わりの中で音声言語の表出が飛躍的に増加した様子が観察された。また、セッションの中でのやりとりでも、過去の経験と現在の出来事をつなげる一つの単語から他の単語へ結びつけて話す様子も見られてきた。

表1. 手話及び音声言語の表出語彙数の月齢変化

語彙カテゴリー	36M		39M		42M		46M	
	手	音	手	音	手	音	手	音
幼児語 (12)	10	7	8	8	12	7	—	—
動物の名前 (43)	40	6	40	7	41	23	42	32
乗り物 (14)	12	4	14	2	13	8	12	11
おもちゃ (18)	15	0	17	1	15	7	14	13
食べ物と飲み物 (68)	48	5	56	12	57	31	61	40
衣類 (28)	23	1	24	2	25	10	19	17
体の部分 (27)	24	7	25	8	25	15	27	22
家具と部屋 (33)	20	1	24	2	23	9	23	20
小さな家庭用品 (50)	32	0	39	1	40	12	40	37
戸外のもの (31)	20	2	23	3	25	14	27	22
おでかけ (22)	9	0	12	2	14	3	15	11
人々 (29)	20	6	22	9	25	11	25	23
日課とあいさつ (25)	24	7	25	15	25	21	25	25
動作語 (103)	83	3	86	12	91	14	97	51
時間 (12)	6	0	8	0	10	3	9	6
ようす・性質 (63)	51	9	52	18	36	35	58	47
代名詞 (22)	13	0	2	1	8	4	13	11
質問 (10)	5	0	5	4	6	3	7	7
位置と場所 (26)	13	0	14	1	15	7	17	14
数量 (17)	12	0	14	2	15	9	16	16
接続 (6)	1	0	0	0	0	0	3	3
幼児語その2 (29)	0	0	7	7	—	—	—	—
会話語 (14)	8	0	7	2	7	3	11	11
その他 (9)	8	1	8	2	7	7	9	9
合計	497	59	532	121	535	256	570	448

注) 1. 語彙カテゴリーの分類は、日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙「語と文法」に基づく。

2. 上段の36, 39, 42, 46はそれぞれ月齢を示す。

3. 手は手話、音は音声言語を示す。

4. —は未調査を示す。

【考察】

本児は3歳になるまで同年齢の幼児と遊ぶ機会が少なかったが、聴覚特別支援学校幼稚部に入学し、同年代の幼児とのあそびの経験を共有したこと、そして報告者によるセッションの中で絵日記を使いながら経験の言語化を促したことにより、動作語やようす・性質に関する音声言語が増加したものと考えられる。セッションの中で使用した単語や絵日記に出てきたことばを絵で確認し、カテゴリーに分けて絵を貼り付けた絵カードを作成し、新出単語と結びつけたり、経験と照らし合わせたりしたことが語彙の発達に有効であったと考えられる。報告者らは母親に絵日記の作成についての助言をした。また、セッションのときには、母親が本児の伝えきれない内容を補うなどの支援をし、本児と報告者がよりよい関係を作れるよう協力的にかかわってくれた意義も大きいと考える。また、保護者、医療機関の言語聴覚士、報告者が定期的に本児についての共通理解を図ったことは有効であった。手話により単語の意味を捉えてから、その単語の音声言語を獲得するという過程が本児の「言語発達」促進につながっている。

(NIWANO Katsuko, SASAKI Akiko)